

特別寄稿

常民文化研究 第二卷(二〇一三)

神奈川大学日本常民文化研究所史異聞

(1)

橘川 俊忠

——「失敗史は書けぬものか」の意味を探って——

はじめに

「紺屋の白袴」、「医者の不養生」、いずれも専門家というものは、自分自身については専門領域に関する事であるのに、案外無関心あるいは無知であるということを指摘していることわざである。それにならっていえば、「歴史家の歴史知らず」とでもいうようなことが言えそうである。歴史家はそれぞれ時代や研究対象などに分かれた専門分野を持っており、その専門以外の分野については知らないことも少なくないということを言いたいわけではない。これは、自分自身の反省も込めて言いたいのであるが、自分の研究を成り立たせている組織や所属している機関などの歴史について、意外と無知、無頓着であるということの意味しているつもりである。

もちろん、研究者が自分の専門分野で研究成果（業績）をあげることを最優先に考えることを否定するつもりはない。しかし、時に

は、自分の研究がどんな基盤によって支えられているのか、研究活動のみならず、自分の生活も含めてその費用はどのように賄われているのか、あるいは自分が専門としている研究領域・研究方法はどのように形成されてきたのか、などという点についても、時に考察を加えてみることも必要だろう。研究活動そのものの意義を再確認し、さらに新しい意義を発見することもありうるからである。

研究を成り立たせている組織や機関の歴史は、学会、大学、研究所、協会、研究会など様々な組織・機関で作られてきたことはいまでもない。それぞれ性格は異なるであろうが、総じていえば、それらの組織・機関の何十年史という類の記述は、どちらかといえば、業績や功績に重点を置きたいいわゆる「正史」的なものになりがちで、そこに新しい問題意識を見出そうとする姿勢には乏しいことは否めない。

私が、上述のような問題を考えるようになったのは、もともと歴史や民俗の研究者ではなく、ある意味では偶然にそういう分野に引

き込まれることになったという事情によるところが大きい。さらに、民間にあった現代風にいえばボランテア的な研究団体が、大学というれっきとした研究・教育機関の一部に組み込まれ、そこに適応せざるをえなくされる過程で、様々な軋轢・摩擦を見聞きし、途中からはそれを体験させられることになったことも、比較的客観的に問題を考えることを可能にしたということもあった。

しかし、そういう環境的要因だけではなく、神奈川大学日本常民文化研究所の研究・調査活動に参加する中で主体的に考えさせられるようになった経験が決定的であった。これは、いづれ詳しく紹介・検討することになるが、常民文化研究所の調査・研究活動の中で、最も大規模なものになった奥能登時国家調査での経験がそれである。この調査は、網野善彦が主導した調査で、借用古文書の返却をきっかけに始まり、歴史・民俗・考古・建築など多分野にわたる総合調査に発展した。古文書所蔵者、地元研究者・自治体関係者の協力を得て、神奈川大学日本常民文化研究所の所員・職員および神奈川大学の院生・学生を主体とし、神奈川大学外から協力を要請した研究者など、そこに関係した人々も多数であっただけではなく、実に多様性に富んでいた。

調査団の構成員だけではなく、濃淡の差はあれ様々なレベルで関わった人々の集合体の複雑さは、ある意味では調査の対象とした時国家を中心とした奥能登地域の歴史・文化の複雑さの反映でもあったのかもしれない。いづれにしても、その複雑さを抱えながら、その活動に方向性を与え、研究成果をあげることを課題として引き受

けた調査団の責任者の負った重圧の大きさはどれほどのものがあったか。責任者であった網野が、毎年かなり詳細な調査活動自体の記録を書き続けたのも、その責任の重さを自覚していた故であったであろう。当時、そうした調査活動記録の重要性に明確に気づかずにいた自分を恥じるばかりである。それはともかく、今、この調査活動記録（神奈川大学日本常民文化研究所奥能登調査研究会編『奥能登と時国家 調査研究編Ⅰ』平凡社刊参照）を読み直して、調査や研究がどのようにして可能になるのか、そしてそのことを問うこの意味はどこにあるのか、改めて考えなければならぬという思いを強くしている。

さらに、このような研究組織の活動の歴史へのトータルな関心を引き出すもう一つの要因についても言及しておかなければならない。それは、渋沢敬三が口にしていたという「失敗史は書けぬものか」という言葉のことである。渋沢は、『大歩当棒録』にその言葉を表題にした文章を書いているが、私がその言葉を知ったのは、網野の口を通じてであった。網野は、奥能登調査が暗礁に乗り上げそうになると、繰り返して「失敗史は書けぬものか」とつぶやいていた。当時、その言葉の意味について深く考えることもなかったが、大学を退職し、常民研からも遠ざかるようになって、ああすればよかった、こうもできたはずなどと反省の思いがつのことも多く、その度にその言葉が脳裏に浮かぶようになってきた。

振り返ってみると、神奈川大学に移管されて以後の常民研でともに活動してきた同僚の多くが鬼籍に入り、往時を知る人も少なくな

った。過去を知る人が少なくなればなるほど、一つの組織の歴史をまとめるにあたって、業績に目がいきがちになることは避け難いであろう。そうした傾向に陥ることを避け、成功よりも失敗からこそ多くを学ぶことができることの自覚が迫られているとすれば、その失敗を知る者には、その記録を残すことが義務となるのではなからうか。

だからといって、ここで失敗話ばかりを並べ立てるつもりはない。第一、何が失敗であり、何が成功であるかなどということは、簡単に決められることではない。したがって、「失敗史は書けぬものか」という問いは、成功・業績探しに陥らないための警句として、先ずは受け止めておきたい。ただ、そういう観点から過去を振り返ると、成功や業績は論文・資料集・報告書などの形で残る可能性が高く、再発見・再評価もしやすいのに対して、失敗はそういう形では残り難く、記録化されることも少ないということに気づく。その経験は、記録化される以前の記憶の中にのみ残されることになりがちだからである。

私が、神奈川大学日本常民文化研究所の歴史を記述するにあたって、「神奈川大学日本常民文化研究所史異聞」というタイトルを付けたのは、その記述の基礎としている「事実」の中で私個人の経験と記憶が占める割合が高いことを考えたためである。退職した者が「正史」を書くことはあり得ないし、単なる回顧談をするつもりもない。あくまで、研究の基礎にある問題を探り出すことを目的に、個人的経験とその記憶を、できるかぎり実証し得る資料を参照しつ

つ整理して提示するという意図を表現しようという思いを、このタイトルには込めたつもりである。

神奈川大学日本常民文化研究所の歴史を振り返るにあたって、筆者の個人的意図や姿勢について語るのはこれくらいにして、日本常民文化研究所が神奈川大学日本常民文化研究所に移行した前後の事情を概観しておこう。

一 神奈川大学移管前後の状況

渋谷敬三の私的集まりから始まったアチックミュージウムが、日本常民文化研究所と改称し、第二次世界大戦を乗り越え、財団法人日本常民文化研究所として再出発してから、三〇年余り、研究所をめぐる状況は大きく変わっていった。一九六三年、研究所の創立者であり、大バトロンであり、名コンダクターであった渋谷敬三が亡くなり、第二次大戦以前から集まっていた多くの研究者も、それぞれ大学や研究機関などに道を得、研究者としての地歩を固め、研究所から距離を置かざるをえない状況になっていた。

晩年、敬三は、常民文化研究所の活動を振り返って、「一番の業績は、多数の博士を作ったことかな」と述懐していたと、子息の雅英から聞いたことがある。研究所の組織としての拡大ではなく、新しい研究領域・方法の開拓とそれを担う人材の養成を主要な役割としてきた研究所が、どれほど多彩な人材を輩出し、新しい学問研究の分野を切り開いてきたかは、ここでは述べない。財政的基盤が弱

体化し、公的な委託研究も縮小される状況では、専任の研究員・職員体制を維持することは困難であったことは想像に難くない。『庶民生活叢書』や『日本常民生活絵引』などの出版活動も、研究所運営費を賄うにはとても十分と言えるほどのものではなかった。敬三と研究所の活動に参加してきた若い研究者達が、大学や学会に活動の重点を移し、それぞれの場で重要な役割を担うようになったことは、研究者養成の観点からすれば研究所にとって喜ぶべきことであつたに違いないが、研究所の組織としての活動力の低下を招いたことも否定できない。また、文字通り研究所の柱石であつた敬三の没後、敬三のような求心力を敬三以外の誰かに期待することも難しかった。優秀だが、個性の強い研究者の集団が、内部的な対立を克服できず、分解していくのもやむを得なかつたかもしれない。

さらに、研究所には、収集した資料をどのように維持管理し、利用可能な状態にしていくなかという難題ものしかかつてきていた。アチックミュゼウム以来、研究所には、収集したり、寄贈されたり、購入したりした大量かつ多様な資料・蔵書があつた。それらの資料・蔵書群について、敬三は、将来の保存・管理・利用の方法を模索し、独自に博物館や資料館の構想も検討していたが、戦後の様々な状況の変化によって、最終的には保存・管理が可能な機関・施設へ移管することにせざるを得なかつたようである。大量の民具は大阪千里の国立民族学博物館、漁業関係の古文書・書籍は水産庁水産資料館、民俗学・歴史学などの蔵書は流通経済大学にそれぞれ寄贈・移管された。その寄贈・移管の過程に、それぞれ複雑な事情

があり、検討されるべき問題点があることは言うまでもないが、それにはここでは触れない。

収集資料群の中心的部分は、上述のように移管され、現在に至るまで保存・整理されているが、その他にもなお相当量の資料が残されていた。その状態は、後に神奈川大学日本常民文化研究所の所員となる田島佳也が、『民具マンスリー』一四卷一二号（一九八二年三月一〇日）に書いた「研究所の引越に参加して」という一文に活写されている。「マンションの八階にある一LKの三田の研究所では、蔵書・資料・民具が風呂場・ベランダの物置まで席巻し山積みされていた。硬質の鉄製書架さえもその重量で変形していた。收拾整理が十分つかない状況であつた。床が抜けず、良くこの狭い室に納まつていたものと、まず驚く。そしてこの室での活動が限界に達していることが、一見してわかつた。と同時に、いままでの所員の心労が偲ばれる。」と田島の観察は続く。この他にも、当時の所員の個人宅や、勤務先の大学の研究室などにも分散保管されていた資料もあり、その全体は今でも完全に把握されているとはいひ難いほどの状況であつた。

そうした資料の保管状況の中で、最も問題であつたのは、一九五〇年から始まつた漁業制度資料の収集事業によって集められた古文書、筆写された稿本をどうするかということであつた。この事業は、農林省からの委託事業で、水産庁から毎年相当の額の委託費を貰つて、約五年にわたって続けられた。文字通り、全国津々浦々に資料調査に訪れ、古文書を借用し、カーボン紙を挟んで筆写し、三部な

いし二部の筆写原稿を作成し、その量は三〇万枚に及ぶという大事業であった。ところが、この事業も、委託費を打ち切れ、借用文書の返還もままならないという状況に追い込まれ、原稿の校閲や公開の目途も立たないまま時日の経過にまかせざるをえないということになってしまっていた。

また、この事業は、戦後の混乱もまだ完全におさまってはいない時代状況を考えればやむをえない事情もあったかもしれないが、とにかく集めるだけ集めるという方針で膨大な古文書を借用してきたために、きちんと返却する態勢を整えることができないうちに終了ということになってしまった。借用してから三〇年が経過し、返却の問い合わせも届くようになり、その声に応えなければならないという大きな宿題が残されていたのである。

資料について、以上のような問題を抱えつつ、他方で研究所は、新しい課題への取り組みも始めていた。『民具マンスリー』の発刊と「民具研究講座」の開催という事業である。漁業制度資料の収集事業が終了した後、研究所の活動はしばらく停滞することになったが、敬三の発案で「日本常民生活絵引」の作業が始まったという。

敬三は、早くから索引を作ることの意味を重視し、文字資料のみならず、絵画資料でも索引を作ることを考えていたようで、

日本の絵巻という独特の絵画から常民の生活振りが分かる部分を切り取り、絵による索引を作ろうというのである。この事業とアチック以来の民具収集・研究の実績を踏まえて、民具研究の体系化・組織化の課題を担おうとしたのである。

『民具マンスリー』は、地方・民間の研究者の情報交換・交流の媒体として民具研究の拡大・深化に成果をあげ、そうした成果は、さらに民具研究講座から地域民具学会結成へとつながっていった。

こうした民具研究の進展は、研究所にとって期待していたことではあったが、その進展は研究所の業務にも新たな負担を強いる側面もあったであろうと推察されるが、それに対応する体制を整備する体力が研究所に残っていたかどうか。これも、研究所存続の保証を、研究所外の何らかの機関に求めざるをなくさせていたのであろう。

こうした内外の困難を迎えている時期に、研究所に手を差し伸べてくれたのが神奈川大学であり、種々交渉の結果、日本常民文化研究所は一九八二年四月から神奈川大学の付置研究所として再出発することになったのである。この間、研究所に手を差し伸べようとしたのは、神奈川大学だけではなく、複数の大学が声を掛けてきたという。

筆者が、後年、渋谷雅英から聞いたところでは、慶応大学も手を挙げていたという。慶応大学は、日本常民文化研究所と関係のあった速水融も在籍しており、第三回の民具研究講座も開催され、その時日本民具学会が設立されるなど浅からぬ関係があった。慶応大学との話が、どのくらい現実味があり、どのような形で進められていたのかは、今では知る由もない。しかし、当時の研究所の状態を考えると、研究所を引き受けるには大学としても相当な覚悟が必要で、研究者レベルでは解決できない問題も多々あったはずなので、大規模大学ではかえって受け入れが難しかったのかもしれない。その点、

中規模大学である神奈川大学が、それらの条件を満たしやすかったであろう。研究員・職員の処遇、収集資料の保管・整備、それに伴う所蔵者との関係の再構築、出版・講座開催などの実務、研究・調査活動の継続等々、今から考えれば、よく引き受けたものだ感慨を催すほどの決断によって、神奈川大学日本常民文化研究所が設立されることになったのである。

二 引き継がれるべき課題は何だったか

すでに創立から六〇年の歴史を持ち、独自の研究分野を切り開き、斬新な方法論を提起し、学問世界に確かな地位を占めてきた特色ある民間の研究機関を移管するにあたって、移譲する側も引き受ける側も、それまでの研究所の実績を振り返り、継続すべき課題を整理することが必要であった。移管にあたって、財団法人日本常民文化研究所と学校法人神奈川大学との間に交わされた「覚書」にまとめられた事項は、その検討の結果ということになるが、そうした形式的なものには表現しきれなかった問題も少なくなかった。それらの問題は、移管した年の一月に行われ、平凡社の『月刊百科』1982 no.235』に掲載された「渋沢敏三と日本常民文化研究所」と題する座談会に窺うことができる。

この座談会は、網野善彦（神奈川大学短期大学部教授・日本常民文化研究所所員）を司会として河岡武春（神奈川大学教授・日本常民文化研究所専任所員）、二野瓶徳夫（国立国会図書館調査立法考査局次長）、

丹羽邦男（神奈川大学経済学部教授）、山口和雄（創価大学経営学部教授）、山口徹（神奈川大学日本常民文化研究所所長）の五名が参加して行われた。肩書を見ると網野・河岡は神奈川大学教員であるが、まだ赴任したばかりで、実質的には財団法人日本常民文化研究所側の立場に立っていると思われる発言が多い。その意味では、丹羽と山口徹の二人が大学側で、財団常民側の話を聞くという構図になっている。

ここで、渋沢敏三やアチック・祭魚洞・常民文化研究所・財団常民という長い研究・調査活動の歴史についての座談の内容をすべて紹介することはできない。しかし、内容を読んでもみると、財団常民の側が、過去の実績の中から何を引き継いで欲しいと考えているのかを思わず吐露しているようにも感じられる。そこで、そう感じられる論点に絞って整理してみよう。

民具や漁業史というそれまであまり注目されてこなかった研究分野を開拓したことは言うまでもないが、研究方法の点でも、できるだけ広く収集し、分析するという帰納的方法を重視する姿勢を貫いた。また、調査においては調査対象地域の全体像の把握を心掛け、専門分野を超えた総合的視点に立つことにとめた。したがって、地方の調査は、異なる専門分野の研究者のチームを作り、共同調査として実施した。さらに、その調査は一時的なものに終わらせることなく継続的に実施することを目指した。資料も、調査者の興味にしたがって切り取ってくるのではなく、伝来してきた資料全体を対象とし、その整理・保存にも注意を払った。資料をカード化し、整

理する、また、文献索引を作るなど資料データを誰にでも利用できるような形で公開することも目指していた。

さらに、これは、研究とは異なる位相に属することであるが、優れた伝承者を見つけ、伝承者自ら伝承を記録化することを援助することにも力を注いだ。生活の記録や民俗伝承は、実際に生活している人間、生きている民俗を生きたまま伝承している人間、そういう人々がみずから記録化することによって、最もよく資料化されるという考えがあった。そしてそれは、「常民文化叢書」として実際に刊行された。また、生活・民俗の記録化という点では、この座談会では、触れられていないが、写真・映画などの影像による記録化にも意欲的に取り組んでいた。それは、今日では映像民俗学と呼ばれることになる新しい研究分野の先駆となった。さらに、神奈川大学のCOEプロジェクト「非文字資料の体系化」の基礎となったのである。

このように、移管以前の常民文化研究所の活動は斬新かつ多彩な内容を持ち、またそれ故に優秀な研究者・調査者を結びつけ、日本の民間の研究機関として極めて珍しい貴重な成果をあげてきたといってもよいであろう。その活動の自由かつ多様な展開の過程を聞かされた山口徹は、「常民文化研究所は渋沢さんの時期でも、その後についても文字どおり民間の研究所でした。その意味でアカデミズムに毒されないで自由にできたという部分がありますが、神奈川大学は私学であっても、やはり大学という機関であり、組織であるわけですから、どうしてもアカデミズムのにおいがしてくる危険があ

るのではないかと思います。その場合、大学の中に入ることによって一つの枠が出てくるとしても、その中でこれまでの自由な伝統をどう継承していくかということがいちばん大事な点になるのではないでしょうか。」と答えている。神奈川大学日本常民文化研究所の歴史を振り返る場合、一つの、そして重要な視点となる問題が提起されているといえてよいであろう。

そして、その発言に続けて、山口徹は、「今まで文部省史料館や水産庁資料館などに散ってしまっている渋沢さんの集められた文献を、複写なりなんらかのかたちで神奈川大学に集めて復元し、その成果を全面的に公開できるようになかたちにする作業をかなり時間をかけてやらなければなりません。恐らくその中で月島時代の積み残しのいろいろな問題も解決していかなければいけないんじゃないかということになるんですよ。」と、当面の研究所の課題をあげている。しかし、この課題は、想像以上の困難に遭遇し、複雑で、時間のかかる作業になることが後に分かってくるが、それについてはいづれ論ずることにしたい。

三 神奈川大学日本常民文化研究所の発足

今にして思えば、日本常民文化研究所の神奈川大学への移管は、研究所の歴史を丸ごと引き受けるということであれば、とてつもない大仕事であった。苦境に陥った研究所をとにかくその活動の火を消さないようにする、という以外に何ができたのか、忸怩たる思い

にとらわれることなきにしもあらず、というのが正直なところである。いずれにしても評価は後世を待つ以外にはない。ここからが、神奈川大学日本常民文化研究所の歴史の話に入っていくことになるが、とりあえず、神奈川大学日本常民文化研究所の出発時点の組織体制について概略を確認しておこう。

研究所所員会議事録は、昭和五十七年四月八日の日付のある第四回から残っているが、それによると出席者は九名、場所は神奈川大学日本常民文化研究所会議室となっている。出席者は、山口徹所長、網野善彦、西和夫、和崎春日、山崎巖、河岡武春、田島佳也、田辺律子、山本温子の九名他に橘川が括弧つきで記載されている。経過報告の①人事についての項に、「法学部助教授橘川先生を兼任所員としてむかえた。四月一日付で河岡武春氏を経済学部教授・常民の専任所員として発令。事務嘱託として山本温子さん、田島佳也さん（実質所員）が決定した。」とある。橘川に括弧がつき、出席者の中に数えられていないのは、まだ手続きの途中で正式に兼任所員の辞令がだされていないためと思われるが、自分でもこの会議に出席したかどうか記憶にない。

このメンバーの内、山崎はすでに退職しており、この日が最後の出席、網野、西、和崎はそれぞれ短期大学部、工学部、外国語学部の専任教員で、兼任の所員、山口所長と河岡が経済学部にも所属する教員であるが、研究所の専任所員として学部所属の教員が負う義務・負担の一部を軽減されていた。田辺は、河岡同様財団常民から転籍してきたが、所属は専任の事務職員、山本、田島は嘱託事務職

員で田島については事実上研究職として扱うことにしたようである。簡単に言えば、研究者として研究所に専属するのは山口、河岡、半専属的な立場にあったのが網野、田島、事務職員として田辺、山本の計六名が実質的に研究所を担っていくメンバーであり、他は兼任所員として補助的な、あるいは学部代表としての形式的立場に位置づけられていた。

私、橘川についていえば、ほとんど専門との関係もなく、前年に着任したばかりで、神奈川大学についても、もちろん日本常民文化研究所についても漠然とした認識しかもたない状態で、しばらくは何をしろという指示もなく、研究所に何の貢献もできない付録のような存在にすぎなかった。これも今から振り返ればということになるが、前述したような神奈川大学日本常民文化研究所として引き継がなければならない活動実績やその研究上また社会的な意義に対して、出発点における研究所のこうした体制の不十分さに驚かされる。

その不十分さは、人事体制だけではなかった。施設の面でも、その貧弱さは覆うべくもなかった。与えられた場所は、九号館三階の経済学部の日本経済史共同研究室の一部屋と書庫、その後何度か移転を重ね、スペース的にも設備的にも少しずつ改善されていたが、初期には神奈川大学において学部の基礎を持たない研究所の「悲哀」を味あわされたものである。

それはともかく、様々な問題を抱えながら、日本常民文化研究所の神奈川大学への移管は実現した。「異聞」第一回は、出発点の状況を確認したところで筆を置くことにしよう。

なお、この「異聞」を書くに当たって、二つのことをお断りしておきたい。一つは、文中人名については一切敬称を省略させていただいたことである。記述の客観性を保つためとはいえ、敬意をもって接せさせていただいた方々を呼び捨て同然に記述することは本当に心苦しいことではあるが、意のあるところをお汲み取りいただきたいと願うばかりである。

もう一つは、この「異聞」と並行して、『神奈川大学史紀要』に「神奈川大学と日本常民文化研究所の40年を振り返る——研究機関としての大学の在り方を考えるために」と題した文章を執筆・掲載していることである。元々、別々の機関として出発し、それぞれがそれぞれの論理・立場を維持しながら一つの組織に統合された、もっと端的に言えば小さい方が大きい方に包摂されて活動を継続してきたという事情を考慮すると、単一の記述の中に問題を押し込めることは、今後に生かすべき問題を見損なう恐れがある。両方に身を置いてきたからといって、簡単に問題を切り分け、うまく書き分けることができるかどうか自信があるわけではないが、試みる意義はあるだろうと考えている。合わせ読んでいただければ幸いである。